

中途障害者の障害受容について

豊田 香帆 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 中道 莉央

キーワード：中途障害，障害受容，社会

1. 諸言

中途障害者の課題の1つとして、受傷後の2つの心の苦しみがある。第1の苦しみは自分の中から生じる苦しみで、第2の苦しみは社会（他人）から負わせられる苦しみである（南雲，2008）。この2つの苦しみをどのように乗り越えてきたのか、障害者本人から見た障害受容を明らかにすることで、障害者本人が求める社会受容が明らかになるのではないだろうか。

本研究では、中途障害者がどのような過程を経て自らの障害を受容したのかを明らかにするとともに、障害者本人から見た障害受容とは何かを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

対象は以下の3名とした。個別に半構造化インタビューを試みた。調査期間は2017年10月下旬である。

- ・Aさん（49歳男性）18歳の時に機械に巻き込まれ右腕上肢切断。
- ・Mさん（49歳男性）19歳の時に交通事故で脊髄損傷。現在は車いすで生活。
- ・Hさん（54歳男性）6歳の時に骨肉腫になり、右足大腿切断。現在は義足で生活。

3. 結果および考察

Aさんに関しては、受傷後の職業訓練所で自分よりも重い障害を持つ人たちとの出会い、スキーで出会った健常の指導者に特別扱いを受けなかったこと、そして結婚や家族の存在が障害受容に影響を与えていた。また、障害者スポーツと出会い、指導者として自分にも出来ることがあると自分の価値を再建出来たことが要因になっていた。

Mさんに関しては、受傷後の自宅に引きこ

もっていた時に映画に連れ出してくれた友人、その後スポーツを通して出会った障害のある仲間の存在が障害受容に影響していた。

Hさんに関しては、幼少期の受傷のため障害者という意識があまりなかった点は2名と異なっていたが、両親が特別扱いなどをせずに外に連れ出したり、幼稚園・小学校の友達が普通に接してくれたりしていたことから、家族を含む周囲の存在やスポーツとの関わりが影響していることが、3名の障害受容に共通していたことが確認された。

中途障害者が自己を受け容れ、社会から受け容れられていることを実感するには、障害のある者同士の交流や身近な健常者との変わらぬ交流が重要であることがわかった。失った機能を嘆いたり他と比較するのではなく、障害を負っても依然として有している人格や能力に内在する価値を自ら実感し、他者（社会）と共有することが障害受容を促進させると考えられた。

4. まとめ

Aさんが「100人いたら100通りの考え方があるから受け容れている人もいれば受け容れていない人もいる」と述べるように、障害受容は人それぞれであり、そのきっかけもまた人それぞれである。社会が障害者を受け容れ共に生きようとする社会受容のきっかけは、何も特別なことではなく日々の日常の中に溢れており、そのことを社会に生きる一人ひとりが自覚することが重要といえる。

主な引用・参考文献

南雲直二（2008）障害受容と社会受容。音声言語医学，49(2)：132-136。